



恋しくて <  
永遠> 下巻

みしまゆみこ

<中巻、28話～40話です、41話～下巻になります。>

(二十八)

アラスカと日本、純ちゃんと私は遠く離れた場所で、日常を必死で生きていた。

何度かの純ちゃんからの電話での会話で、私は、感の鋭い純ちゃんだから、私に何か変化があった事を感じていると思った！

私はもうこれ以上、私は乳がんになってしまい、手術が必要な事を隠してはおけないと思い決心して、ある日の純ちゃんの電話で打ち明けた！

「私の体に！乳がんが棲みついちやったの！！！」

「だから、少しだけ、手術が必要なそうなの！！！」

だけど、ほんの初期で、乳がんの組織だけを取り除く、手術をする事になったと純ちゃんにストレートに伝えたけれど、言葉ひとつ、ひとつが、まとまりの無いぎこちなさを隠せなかった、果たして、純ちゃんはどんな風に受け止めたのだろうか・・・

純ちゃんは、しばらく、黙ったまま、電話の向こうで、微かに聞こえた！うめき声をあげているように私には感じた！！！

そして、純ちゃんは、深呼吸してから・・・

「カコ、ゴメンね！」

「僕がそばにいてあげられなくて！」

「カコの、体の事、気にしてないよ！」

「直ぐに、又、元気になるものね！」

「今は、素晴らしい医学の発達で乳がんもそれほど怖くないのだよ！」

「初期だと言う事は、ほんのすこし、傷をつけるだけ！」

「でもね、もしもだよ！」

「もしも、片方の胸があれば！」

「僕は、充分だよ！・・・」

「僕は、カコが元気になってくれるほうが嬉しいから・・・」

「僕は、カコのどんな姿も大好きだよ！」

「今すぐに、カコのそばへ行きたいよ！」

そう言いながら、純ちゃんは、言葉にならない、言葉で、何かを言いなら・・・

「今、とにかく、少しでも、早く帰れるように、仕事を頑張るからね！」

「僕を、待っていて・・・」

そう言うのがせいっぱいの、苦しそうで辛そうな、純ちゃんの息づかいが聴こえた。

まだ、アラスカでの取材が半分も進んでいない状態の、この時期に、純ちゃんに知らせる事がどれほどの苦痛になる事か！、わかっていながらも、私の心が不安で純ちゃんにしがみつきたかった。

私は早急に手術をしなくていけない！手術日も決まっているために、黙って手術をする事が純ちゃんへの裏切りになるような気にもなっていたし、辛すぎて話さずにはいられないほど、私の心が弱くなって

いた。

純輔は、予定されたアラスカでの取材期間が伸びて、帰国が遅くなる事を、カコには伝える事が出来なかった。

仕事を優先して、そばにいてあげる事が難しいから！

今回の取材は、同行スタッフも多く、純輔がこの仕事の一番の責任者である事で、一時帰国など許されるはずも無く、又、今、スタッフ、そして、アラスカでの取材協力者全員が一丸と成って、気持ちが盛り上がっている時に、自分の個人的な事情を純ちゃんの性格からして、たぶん、誰にも話さずに、ひとりで、苦しみに耐え、私を、私の体を、純ちゃんは胸が張り裂けるような思いで、心配し、気づかっている事が分かる私は、辛く、寂しくて、不安が大きいけれど、耐えるしかなかった。

純ちゃんは、前にも益して、電話が通じる場所からは、頻繁に電話をして来ては・・・

「ごめん！」「カコ、ゴメン！許して！」

「きっと、大丈夫だから・・・」

いつも、自分がそばにいてあげる事が出来ない事を気にしていて、心配をしている事が、私には良く分かっていた。

(二十九)

純ちゃんは、予定された取材期間が長くなる事で日本への帰国が今、予定する事が出来ない！、その事をどうしてもカコには話せずに辛い日々を、過ごしながらも、その事を周りの人たちには気づかれないように、仕事に集中するしかなかった。

私は純ちゃんからの遠く離れて伝わり来る電話の声が聴き、純ちゃんのその声を聴くだけでも、勇気ももらえているような気がして嬉しかった。

純ちゃんの為、いや、私自身が少しでも健康な体になり永く生きていたい！

そのためにも一日でも早く、手術をしなければと思ひ、手術日を決めたいけれど、いざとなると、今まで、両親へ心配させたくない為に言えなかった事実を伝え、やはり両親はショックが大きくて、オロオロするばかりだったけれど、私は手術の前にしておく事が多い、いろんな雑用があった。

もしもの時に、純ちゃんに迷惑がかからないように、純ちゃんとの繋がりを消す努力も必要だった！担当医は、カコの幼い頃からの長い付き合いから、手術日をカコに優先的に組んでくれてはいても、やはり、ひと月先まで手術スケジュールは一杯で、カコの手術は出来なかった。

今は、それほどまでに、乳がんの患者が多いということなのだろう、担当医は、無表情、無感情に言った！

「君よりも、もっと、深刻な患者さんがいる！」

「でも、君はまだ、手術で治せる時期なのだから！」

「まだ、不幸だとは思わず！」

「あまり、深刻に考えないように！」

そう、言うてはくれるが、私は、何を言われても、気分が晴れる事は無かった。

「ただ、純ちゃんに、逢いたい！」

「無理だとわかっていても、心はわがままになる！」

「時には、行き交う見知らぬ人にまで、怒りの眼差しを向けてしまう・・・」

今の体の状態は、もう、右の肩に重い石を乗せているように腕が重くてあがらない、時には、耐えがたい痛みが背中を突き抜けるような感覚で暴れているような・・・

私の場合、痛みが激しい！、私の知る知識で、不確かな事だが、乳がんは、殆どの人が痛みがないために、気づかない事が多いのだと聞くが、私はもう10年以上前から気になっていた、不快感と痛みがあった。

けれど、純ちゃんの仕事の事や純ちゃんからのプロポーズが嬉しくて、自分の体の事は考えや思いから意識的に遠ざけていたのかもしれない！

それは女として、純ちゃんから感じる熱い眼差しの恋する想いが幸せすぎたから・・・

(三十)

私には、純ちゃんがあまりにも大きな存在であり、ある意味では私のすべてのような気もしていたから、確かに、純ちゃんは、ハリウッド映画に出演した事で、少しだけ、純ちゃんは自分自身が持つ価値感や性格が変化した気もするが、本質的には変わっていないと思いたい！

前のように頻繁に気やすくは逢えないけれど、私を変わりなく大切に想ってくれている事が何より感じているし、ただ、今は、あまりの忙しさに、純ちゃん自身をその時間の流れに飲み込まれまいと必死で自分の居場所を確保している。

自分をその場所に馴染ませる努力をして、今までには考えていなかった事でも、純ちゃんの信じる道の中のひとつなのだと思えるように少しだけ、気持ちや物の見方の中を広げている時期なのだろう・・・そんな純ちゃんにとって、今は一番大切な時期なのに、私の事を思いながら、日々の仕事を頑張っているだろうと思っただけで、私は苦しかった。

やはり、病気の事は伝えるべきではなかったのだ、後悔の気持ちが大きくなって行った。

入院の日が近づいて来たある日、突然、純ちゃんが私の目の前に立っていた。

私は、夢の中で純ちゃんに逢えたのだと錯覚していた、数日前から、風邪の症状があり、熱が三十八度五分ほどある、私は平熱が低く三十五度くらいだから、やはり体が辛くて、家で寝ていたもつねに夢を見ているような現実離れした状態が続いていた。

私の部屋のベットの脇で純ちゃんは黙って、私の顔を見ていてびっくりした。

そして、いきなり、私を抱きしめてくれた！

「どうしても、カコの顔が見たくて、ちょっとだけ、帰ってきた！」

そう言って、又、私を抱きしめた。

その時に聞こえてきた、場違いな声！家の脇の路地に行く、今年始めてきく・・・

「焼き芋～、焼き芋～、や～き～い～も、美味しいよ～」

「なんと場違いな、やきいも屋さんだこと！」

母がいらだつように、私たちの事を気遣いながら言ってるのが聴こえた。

我が家は、小さな住まいだから、外の物音が良く聞こえてしまう！

私が元気な時であれば、母は喜び勇んですぐに飛んで行って買うのがいつものこの時期の行事だ！、その事を焼き芋やさんは覚えていて、少し大きな声を出して、伝えたかったのでしょう。

そんな、外の風景も気づかないように、純ちゃんは私を抱きしめて・・・

どうしても君に逢いたくて、今回のアラスカの取材企画の打ち合わせを、急ぎつくって、二日だけ戻って来たと言った。

純ちゃんは、自分のおでこを、私のおでこにつけてみて！

「カコ、やっぱり、熱があるんだね！」

「僕の顔を見て、急に熱が出たのかな・・・」

純ちゃんは無理にジョークを言っっては、少しでも私に心配な気持ちを見せないように純ちゃんのオーバーな仕草が夢の中で観ているような気もして可笑しかったし、嬉しかった・・・

私の熱い体は、純ちゃんの冷えた、冷たい頬がとても気持ちが良い感触・・・

私はながい夢を見ているように、純ちゃんの幻を見ているような・・・

(三十一)

純ちゃんは、つぶやくように言った！

「日本を離れていると、季節感が分からなくなるな～」

少し照れながら、体調が悪い私をきつく抱きしめた事が、気まずく思ったようで・・・

「もう、焼き芋やさんが来る季節なんだね！」

「カコ、おいも、食べてみる！」

突拍子もなく、照れ隠しのように、そう純ちゃんがすすめてくれると、私は不思議に、なんとなく、食べたいような気がした。

私はもう何日も、あまり、食欲がなくて、口の中がかさつき、食べ物の味がしない、ただ苦味があるだけで食べ物が喉を通らなくて困っていた。

私が返事をする間もなく、部屋を出て行ったが、母が直ぐに気づき！

「もう、買いに行っても、間に合わないから・・・」

玄関で、止められたと言って、私の部屋に戻って来た。

「アラスカはもう雪が降る日もあるけど！」

「8月の末になったばかりだから、日本はまだ夏だったね！」

「ここの焼き芋やさんは、変な時期に来るんだね！」

確かに、世間一般的では、この時期に焼き芋屋さんは似合わないけれど、なぜか、この土地、我が家では、不思議な事ではなかった。

純ちゃんは、突然、仕事の話をはじめた、「カリブーやビックベアー（グリズリー）」にすぐ近くで遭遇したよ！、しかも何度もだよ！

そうかと思うと、明日、一日だけ何もしなくていい時間があるから、何処か、行きたい所につれて行ってあげる！

「何処にする！」

私は今、外出が出来る状態でない事を純ちゃんはわかっていながらも私の為に何か役立ちたかった！

けれど、純ちゃんは、日本にいられる時間がない事で焦って落ち着けないようだった。

実際に明日、純ちゃんが使えれる時間は半日だけだ、どんな短い時間であっても、一緒にいられる事がふたりは幸せだった。

両親はふたりに気を使い・・・

「今夜は、泊まってくださいね！」

「カコのそばにいてあげてください、お願いします！」

私の両親はいつになく、特に母は強い口調で、純ちゃんにお願いしていた。

私は、やはり、夜になって、39度に熱があがってしまい、意識も途切れがちだったけれど、純ちゃんは、一睡もせず、私のそばにいて、私の高熱を下げようと、介抱してくれている事をおぼろげに感じていた。

私は夢を何度も見ながら・・・

夢の中で、ふたりは、旅をして、楽しく笑いながら、寄り添いながら・・・

そして、私の体は、なぜか、何処か、恐ろしく暗闇の深い谷底へ落ちて行く瞬間に目を覚まし、震えながら、涙を流して・・・

そんな時はいつも、そばで、純ちゃんは私の手を握っていてくれた。

次々とみる夢の中で純ちゃんと私は、以前から約束していながら、叶わずにいた海を見に来ている！

「そしてふたりは手をつなぎ砂浜を元気に走っていたいた！」

今まで一度も海へ行った事がなかったけれど、とても鮮明に浮かぶ、夢の中で！  
誰ひとりとして、人の姿がみえない広い砂浜に座り、波静かな海！大海原をたったふたりだけでいつまでも眺めていた。

(三十二)

カコは高い熱に意識ももうろうとして定かでない！夢をたくさんみた夢の中で、純ちゃんとふたりが砂浜で海を眺めている季節は春なのだろうか？とても明るい陽ざしだ！

太陽が優しく私たちを照らしてくれて、とても気持ちが良いくて、でも、私は耐えられないほど陽ざしが眩しくて眼を閉じてしまう！すると、柔らかに細い光は揺らぎながら、私の眼の奥へ、奥へ、そして、私の体のすべてを揺らぐ光で包んでくれていた。

純ちゃんは何処にいるの？、私のそばで声がしてるのに・・・

「カコ、そっちは危ないからダメだよ！」

「向こうへ一緒に走ってみようか！」

と言ってる声の人は純ちゃんのはずなのに、その人の顔が見えない！

気がつくとも純ちゃんは私の手を取って、ゆっくりと走ってくれる、まるで、碧い空へふたりで飛んで行くように・・・

私と純ちゃんは、海の波うちぎわに裸足になって立っている！

いつの間にか、私の両足の下砂は足の周りから音もなく崩れて行く、足の指先から砂が崩れて行く、少しずつ小さな波が崩して行く！

私はすべて波に包み込まれて体ごと海にのみ込まれてしまうように・・・

そんな怖い夢を何度も繰り返してみても、私はすこし泣いていたのだろうか、純ちゃんは、やさしく私の顔をつめたいタオルで、おでこを冷やしながらも、眼の涙をも拭いてくれていた。

その冷たさがとても気持ちが良いくて、私は又、夢の中へ入って行くようだった。

明け方になって、私は、意識もはっきりとした、どうやら、熱もだいぶ下がったようで、目覚めると、母が笑顔で私に話しかけた。

「すこしは、気分が良くなったかしら！」

「熱は三十六度までさがってるわ～」

もう少し、ゆっくりとおやすみなさいね！そう言って、洗面器やタオルを持って、部屋を出て行った。

昨日、確かに、純ちゃんがいてくれたのに、どうしたのかしら、姿が見えないけれど、あれはすべて夢の中の事だったのかしら・・・

確かに、私を、抱きしめてくれて、あの頬の冷たさの感触があるのに！あの感覚は幻だったの・・・

又、母が部屋に入って来た！

「なぜ、純ちゃんは私のそばにいてくれないの？」

どうして母は何も話してくれないのかしら、まるで私に意地悪してるように！、いつもの優しい母ではないは、なぜ？！

私はもうこれ以上、我慢できない！

「ママ！純ちゃんは、何処にいるの！」

いきなり、私は、もう長い間、使っていなかった「ママ」という呼び方がなぜか出てきた！

(三十三)

カコが幼かった頃に良く使った、母への一種の甘えたい時の呼び方だったので、母はびっくりしたように、しばらく、私の顔を見てから・・・

「あなたのそばで、熱が下がるまで！」

「朝方まで、ず～と！」

「純輔さんは、貴方の看病をしてくれたのよ！」

「ここに、いられる時間のぎりぎりまでね！」

「すこし、休んで、私が替わるからと、何度も言って、聞かずにね！」

「本当に、一睡もせずに、氷水でタオルをゆすぎながら変えてね！」

「あなたの額のタオルを必死で取り替えてくれたのよ！」

「朝方に、あなたが熱が下がってから！」

「カコが落ち着いたことを確かめてから・・・」

「どうか、カコさんをよろしくお願いします！」

まるで、私たち、親よりも、必死になって看病してくださって、ありがたいけれど、純輔さんも忙しい体で疲れているだろうに・・・

「純輔さんは本当に優しい人ね！」

母は、急に呼び方まで変えて、感激していた、純ちゃんに対しての嬉しさと感謝する気持ちから、母はすこし、涙ぐんでいたようだった。

「今日、アラスカへ戻りますが！」

「カコさんには、又、時間をつくって、必ず来るからと、伝えてください！」

そう言って、今朝の5時過ぎに純輔さんは出かけたのよ！

私は何処へもぶつけようの無い、寂しさと怒りのような感情が、弱った体で震えながら言った！

「どうして、私を、おこしてくれなかったの！」

「純ちゃんが、帰るからって一言、いってくれれば・・・」

母が困っているのは分かっていた、私の我がままだと言う事も、十分に理解していた！

けれど、心が許せない怒る気持ちになる！

それは、自分自身へ情けない思いと怒りと寂しさと悲しみである事を私が一番良く知っていた。

ベットで横になっていても、気持ちが暗くなるばかりだった。

しばらくして、耳障りの良い、聞きなれた、音楽！

「サイダーハウス・ルームのメインテーマ」

純ちゃんとふたりで何度となく見た韓国のドラマ「遠い路」に使われていて、私の大好きな、憧れの俳優「美しき人」が演じている主人公が、とても、純ちゃんの雰囲気と似ていた。

いつかこんな風な役で主演を演じて見たいと言った、その時の純ちゃんの眼がキラキラと輝いていたのを私は忘れられない！

ふたりの大好きな曲だ！！！！

私は病弱な体だから、友人や世間とはつながりが少ない為、あまり使う事のない携帯電話！

まるで純ちゃんと私との専用の電話のような！ベットの横においてある携帯電話からあの懐かしい曲が流れた。

「今、僕は成田でございませう！」

「どうでしょうか、姫のお体のお具合は・・・」

「姫がお元気でいてくださらないと僕はとても悲しいです・・・」



(三十四)

純ちゃんのそんなジョークも寂しさを隠しての言葉で、私を元気づけてくれる為の精一杯の純ちゃんの優しい気づかいが私には辛かった。

私の部屋で、一晩中、私の高熱を下げる為に、冷たい氷水に手をつけて、看病して、寝ずに又、アラスカへ向かった。

シアトル経由でも、殆ど一日がかりだ！飛行機の中で少しでも、寝られたら良いのだけれど、日本から持ち込む、いろんな資料に眼を通さなくてはいけない仕事を山ほど抱えているのだろう・・・

私のところによったばかりに、三日三晩寝ずでの行程は、いくら良く鍛えた体であってもきつい事だろうと、私は気が気じゃなかった。

「じゃ、行ってくるね！」

「今度、逢う時は、ちゃんと僕を成田に迎えに来てね！」

「アンカレジに着いたら又、電話するから・・・」

そう言って、純ちゃんからの電話は切れた、けれど、アンカレジからはなぜか、純ちゃんから電話は無かった！

そんな純ちゃんからの約束を心待ちにしている、連絡が無い事が気になり、不安がよぎりながらも・・・

私は、純ちゃんがアラスカに戻った、数日後に、やっと体を動かせるまでに快復して病院に入院した。今度の入院は、今までの入院とは違って、体にメスを入れる手術！、しかも、女性としての象徴のような『右乳房を取る』

両親にも、純ちゃんにも、右の乳房を取る事は私には言えなかった！

だが、他への転移を防ぐ為にも、乳房を取る方法しか、私の場合は外になかったのだった。

純ちゃんは、感のいい人だから、ある程度、感づいていたようで・・・

「もしも、もしもの時だよ！」

「君の胸が片方だけでも、僕は充分だと、思うよ！」

そんな、気休めを、さりげなく言ってくれる人だ！

私の両親は、かなりのショックだったようで、ただ無言で、部屋に入って来た。

両親は、担当医からの説明を受けて分かったのだった、乳房を取り除く手術だという事を・・・

私はあえて、両親へも純ちゃんにも知らせずに、私ひとりで決めての入院だった。

私の大切な人たちに何度も辛い話を聞かせたくなかった。

確かに、両親のショックは大きいけれど、これからの日々、どんなに辛くて、苦しむ事には変わりなかった。

相変わらず、入院と同時に、私の腕は、点滴の手ぐさりに繋がれた日々の始まりだった。

血管が細くて、注射針が上手く刺さらないのも同じだ！

いや、前よりも、もっと、試し打ち回数が多くなった気がする。

「痛い、痛い、何処かへ、飛んで行け・・・」

幼かった日、母がよく私に言ってくれたおまじないが懐かしく、虚しくも心をよぎって行く。

たちまち、点滴液が漏れて、私の腕には、いくつもの黒いあざで膨れ上がってきた、この状態も、同じように何度も繰り返した事だった。

(三十五)

看護師さんの中には、さりげない言葉で・・・

「カコさんは痛がりやさんだからと笑いながら言う人もいた」

私はそんなに、わがままで、大げさに騒ぎ立てる人間なのだろうか？

もう、自分がどんな人間なのか、分からなくなって来た。

私には拷問のような辛い日々がつづく・・・

そのころ、純輔は、精一杯、渾身的に取材撮影進めて、アラスカでの取材も終盤を迎えて、久しぶりに、フェアバンクスの郊外、深い森の中にある、高津さんの家で、しばしの休息を楽しんでいた。

九月中旬でも、ここは時々雪が降る冬を迎える時期だった。

家の中は暖炉を焚いて暖かく、快適に過ごせているが、いざ、一步外に出れば、直ぐにからだごと凍りつくほどの寒さだ。

フェアバンクスは、北極圏からすこし南に位置している、アラスカでは第2の大都会だけれど、高津さんの住む、この森は、広大なアラスカでの事、お隣の家が果てしなく遠い、森の中の一軒家だ。

必要最小限の家具があるだけのこじんまりとした家だ、ご夫婦が寝る、寝室があるが、後は大きな書棚のある二十畳ほどの広さの中心に暖炉が置かれていて、食べ物やその他の煮炊きする物は、すべて、この暖炉の上に置くだけで、出来上がっていた。

純輔は、このリビングのソファに寝かせて貰った。

何時間か寝た頃に、高津さんにいきなり起こされた！

「川喜多さん、今、素晴らしいのが出てます！」

「外に、急いで出てください！」

そうせかされて純輔はダウンジャケットを急いではおり、慌てて外へ出てみた！

その世界は、あまりにも、あまりにも、大きな空！！

いや、大宇宙のうねる音がするように、青黒い虹と、簡単な言葉では表現をはいけないほどの気高さと神秘の世界がひろがっていた！

それは「光のロンド」「天空からの光のメッセージを伝えるのように！」

ダイナミックに揺れ動く、大宇宙から聴こえる音楽のように・・・

純輔はあまりに美しく、感動と共に震えるような恐怖感さえ覚えるのでした。

私は、純ちゃんが、終盤の仕事に集中出来るようにと思い、私は、入院後に純ちゃんから電話があっても勤めて明るい声で話す努力をし、手術日を純ちゃんに言わずに・・・

「今ね、私よりも、もっと、大変な患者さんが多いらしいのよ！」

「私は、ちょっと、待たされてるようなの！」

そんなふうに言ったり、時にはどうしても気分が悪くて辛い時などには私の代わりに母に電話に出てもらおう時もある！

「今、検査に行って、ここにいないのよ！」

そんなへたな嘘でごまかしの言葉が私をなを苦しめていた。

(三十六)

私はもう、すべて、検査は済んでいて、手術日は三日後に決まっていた。

遥かに遠い地、アラスカがまるで、宇宙の彼方にあるような気がして、もう、電話さえ出来ないのだと思ひ悲しかった。

手術日の前々日夜明け前に、私は、誰にも言わずに、病室を出て、ただ、ぼんやりと、行き先も決めてなく、電車に乗った・・・

気がつくと、何処かの海の見える場所を歩いていた、この前、純ちゃんが来てくれた時に見た夢の中の風景のようだった。

ふと、母の顔を思い出して、又、母に心配をかけてしまった事に、申し訳ない気持ちとは裏腹に、ただ私を知る人のいない場所、何処かに行ってしまう思いになっていた。

でも、もう一方の私がいて、やはりまだ生きていたい！

こんな形での別れは両親も純ちゃんも許してはくれないと囁いていた、私と言う存在は私だけの意志で終りにしてはいけないのだと気づいた。

「ママ、ごめんなさい！」

「心配しないで、直ぐに戻るから・・・」

「たぶん、今、湘南の海辺にいると思うけれど！」

「もう少し、海を見たら、帰るから・・・」

「ママ、今朝のご飯は何を食べたの？」

「ママの作ってくれるオムレツが食べたい！」

「私、とても、おなかすいたわ～」

「今からここで、何か食べたら、帰るね！」

不思議な事に、自分の心の中で母に語りかけていた、思ってもいなかった言葉が、すらすらと出て来て、自分でも驚いていたが、見ている海の風景は、夢の中で見た事がある場所だと思った。

入院前に、純ちゃんが私を寝ずに看病してくれていた時に見た夢の中の海が今、目の前に広がっていて、エメラルド色の美しい波が揺れていた。

海への波打ち際を、私はひとりで歩く、初秋の海べは、少し肌寒い！

まだ、朝早い時間だからか、広い海岸には人影は無く、誰もいない遠浅の砂浜がつづいていた。

私は裸足になりひとりでゆっくりと歩いて、海水に足をつけて立ち止まる！

私を支えていた砂を、すこし緩やかな波が次々と打ち寄せるたびに削られて採られていく、それは、あの夢の中で見た風景そのものだった。

まるで、私の命を削り取るかのように怖さを感じた。

海水の冷たさと青緑色の波が私の身体中を染めて行くように、ぞくぞくした悪寒を感じて我に返った気がした。

正気を取り戻した私の足元の砂はすっかり波に削り取られて、海にのみこまれて、海水はひざ上にまで来ていた。

気づかぬままに私はいつしか海の中に置き去りにされたように茫然として立っていたのだった！

ふと、私はなぜ！、何を求めて、ここまで来たのだろうか、自分の心に問いかけてみた！

明日の手術が不安だったのかもしれない、孤独さに負けそうな自分を振るい立つ気力が欲しかったのか

もしれない、そんな答えの無い心の葛藤が、ただ、寂しさや悔しさと悲しみをごちゃ混ぜになって、心の中で、純ちゃんを呼び続けたのかもしれない！

(三十七)

私は現実をしっかりと受け止めようと決心して、病院に戻った、やはり、体温が三十八度もあり、血圧も異常に高くなっていた！

私は平熱が三十五度くらいだし、血圧も低い方で高くても100～60が普通だったが、今、手術の前だというのに、血圧が140もあり、担当医は、明日の手術は難しいと、告げに来た。

そのご、手術日がどの位の期間、先送りになるか、予想がつかなかった。

「とにかく、血圧を下げて、体温を下げて、それからの事です！」

手術予定日前日に逃げ出したと思った担当医師は、きつい口調で言った！今は私が悪いのだから、何も言えない！

担当医師の指示に従うしかないのだと、父も母も、オロオロとして、何も手につかぬ様子だった。

私は高い熱のために、その姿を幻のような錯覚をしながら、何度も、何度も、苦しさと胸の痛さで、失神しては目覚めての繰り返しだった。

そして、たくさんの夢を見ていたが、その殆どは、覚えていなかった。

なぜか、山登りなど、体験も記憶もないのに、何度も何度も、何処かの谷底へ、体が、一瞬に落ちて行く！

その感覚だけは、不思議に覚えていた。

やっと体調も快復して、いよいよ、私の手術の計画が本決まりとなり、体調は万全とは言えない状態だけれど、もう、これ以上、先へは伸ばす事が出来ないのだった。

微熱が中々下がらずに、手術をのぼせるだけのぼしたが、担当医の決断を信じるしかないのと、両親も改めて承諾書にサインをした。

「右乳房の全摘出手術だ！」

私は手術の最中の事は何も分からなかった、全身麻酔によるものだったから、幼い頃から、病弱ではあったが、私の体にメスが入るのはやはり、緊張と恐怖感を無くす事は出来なかった。

五時間以上の大手術は、両親も予想していなかった。

手術室から、集中治療室に入っても、私は気づかない、眠ったままだった。

だが、両親は、手術の結果の報告を受けて、愕然として、言葉も出なかったようだった。

「がん細胞が、肺と胃へ転移していた事を告げられた！」

その病状は、もう、手術は出来ないほどのがん細胞の広がりだと、伝えられた。

「肺の組織検査をしたけれど、悪性のがん細胞が確認されました！」

「すでに、今回の手術では肺のがん細胞を取り除く事はしていない！」

「又、数日後に、胃や脊髄の検査が必要な事を伝えられた。」

あまりの残酷な結果報告に、母は、気絶して倒れてしまい、そのまましばらくの間寝付いてしまった事を、父から、だいぶ後になってから、自分の病気の事、母が倒れた事を聞かされた。

(三十八)

カコは自分が生まれて来たことを恨みたくなるほど、何処までも、両親を苦しめて、悲しませて、親不孝ばかりしか出来ない娘だと思う！

つくづく嫌になる悲しみと苦しみの中で、私は両親に対して申し訳なさ自分自身の不安感で心も体も混乱して、ただ、ベットに寝ているしか、今は、何も出来ない絶望的な思いが募るばかりだった。

その頃、遠く離れた地にいる純ちゃんの身にも、大変な事態が起きようとしていた！

アラスカでの映像取材も、チームが一丸となって努力した事でとても良い物が出来あがる予感でチーム全体が浮き足立った状態で、興奮気味だった。

仕事も殆ど終わりに近く、取材チームも、気持ちが楽になり、安堵感が大きくなって、その日の取材予定が終わると夜は連日の酒盛り宴会が続いた。

純輔はカコの病気の事が気になる現実もあり、どちらかと言えば、高津さんも、純輔もアルコールには弱かったし、宴会の雰囲気騒がしさが連日続いて、すこし気疲れしていた時期だった。

残りの取材は、他のプロデューサーでも、大丈夫だと、高津さんの純輔の苦悩を察した事と、純輔のもう一度お会いしたい思いもあって、ふたりで三島さんの所に行く事になった。

あの女性「三島美佐子さん」の姿を見ているだけで純輔は勇気をもらえるような気がしていたので、彼女の家を訪ねて行く事になった。

次の日、出発前に純輔は、カコに何度電話しても繋がらない事がとても気になりながらも、セスナ機に乗り、アラスカの深い森の中へ飛んで行った。

カコの両親は、娘の非常事態を受け止めることが出来ずに、毎日、不安と混乱する思いで虚しく、落胆し、どうする事も出来ない怒りがこみあげて来る、両親の心をずたずたにしてせめつづける、拷問のような胸の痛さに耐えながら、時間だけが過ぎて行った。

カコは、手術後の経過が悪く、快復が思うように進まずに、油断の出来ない状態が続いていた。

意識も精神状態もはっきりと快復しない状態がつづいていた・・・

もちろん、そのような状態であることをアラスカにいる、純輔へ知らせる事など、出来るはずも無く、お互いの連絡が途絶えてしまった。

そして、純輔はカコの事が気になって仕方なかったが、まだ、仕事は終りではなかったけれど、どうしても、あの素敵な生き方の「三島美佐子」さんに、純輔は不思議に、母のような、姉のような親しみを感じていて、もう一度お会いして、話を聞いてみたかった。

無線で三島さんの所へ連絡しても、どうやら外に出ているようで、夏の時期は、とにかく忙しい！アラスカのダイナミックな、フィッシングを楽しむお客さんが日本など外の世界から来る事で、三島さんは自然なかたちで釣り宿の役目を担う事になって、今では、皮肉にも三島さんの生活を支える大きな資金になっていた。

元々ご自分から望んではじめた事ではないが、どうしても断れない、知り合いの旅行社から頼まれて、釣りのポイントへ案内した事がきっかけだった！

言葉の面でやはり日本語や英語をフランス語を話せる事で、フィッシング客を託されて、釣り舟を出し、少数の人の宿泊を引き受けた事で自然に今の状態になってしまったと、三島さんが豪快に笑って話していた姿を純輔は思い出していた。

(三十九)

時には、三島さん自身がボートを動かしてお客さんを案内して、フィッシングポイントまで行くもある！

アラスカは魚や動植物の保護基準がとても厳しく制限されていて、ワンシーズンに現地の人でさえ、ひとりが釣れる魚の数が決まっている。

たとえば、キングサーモンなどは、ワンシーズンに確か、2本までと決められていて（もちろん漁業を生活の糧としている人は、捕れる数量は違うけれど）、でも、そうたやすくつれるわけでもなく、確か、つりの出来る日程も厳しく決められていたように聞いていた。

だから、日本から来て、何日か滞在しても、キングサーモンを釣りあげる事がたやすく出来る事ではなく・・・

三島さんは、わざわざ、遠いところに来てくれるのだからと、心からのもてなしをして歓迎してくれる、何も、お金を儲けようなどとは、到底考える事もなく！！

だから、評判の良い事が新たに人を呼び寄せて、お断りするのにも難しいほどの人気の場所になってしまった。

高津さんと純輔は、三島さんとの連絡がつかぬままに、セスナ機を飛ばして、あの懐かしい場所へ着いた。

相変わらず、丸太を並べただけの棧橋は今にもくずれそうに見えるが、どっこい、セスナ機が巻きおこす大波にもびくともせずに、しっかりと建っていた。

ふたりがセスナ機を降りると、家の扉が開き、三島さんが私たちに駆け寄って来た。

「お待ちしていましたよ！」

「もう、そろそろ、着くかしらと思ってね！」

「今日は、もう、どなたも、来ませんから～」

「もう、嫌になってね、ちょっとずるしたのよ私！」

そう言いながら、にこにこ笑顔で私たちを迎えてくれた。

「今年の夏から秋になっても、困った事に！」

「天候が不順で、サーモンが全くのぼってこないの！」

「他のお魚も殆ど遡上してこなくてぜんぜん釣れないのよ！」

「秋が過ぎて、もう直ぐ冬が来てしまうのに・・・」

「だから、お客さんの機嫌が悪くてね、気が休まらないのよ！」

そう言って、頭をかしげて、手を大きく広げた仕草をしてみせた。

「今日から一週間ほど、私は病気になるつもり！」

「だから、気を使わずに、ここで過ごしてちょうだいな！」

「もしなんでしたら、お熱も出してもいいわ～～～」

「自分のやりたい事がたくさん溜まってしまっていてね！」

「何もおかまい出来ないけれど、その辺にある物を食べてくださいな～」

そういいながらも、美味しい日本茶と、どら焼きを手早く出してくれた。

「お客さんのお土産ですけれど、食べてみて！」

「李さんは、そろそろ、こんなのが恋しい頃でしょう・・・」

いつの間にか、本当に、三島さんは、何処かに消えていなくなった！



(四十)

外は気がつかないうちに、稲妻が走り、途轍もなく大きい雷が鳴って、この家が揺れ動くほどのすさまじい爆音のように響き渡っていた。

窓から外を見ると純輔が今まで見たことの無い、物凄い大雨が降っていた！

三島さんはどうしたのかと思っていたら、雨に濡れて戻って来て・・・

「もう少しで、ボートが流されるどころだったわ～」

「間にあつて良かった、今日はいきなり来たわね！」

「おふたりが着いてからで、カミナリと大雨に出あわなかった事！」

「幸運だったわね・・・」

「ここのところ、毎日、こんな感じなの、天候が予測できないのよ！」

「突然、嵐になったり、吹雪になったり！」

「そうかと思えば、とても、暑くて、一時的に、真夏になったりするのよ！」

「確かに昔から、アラスカは一日のうちに四季があるとされているけれど！」

「なにか、変なのね！最近のアラスカは！」

「だから、サーモンもここまでのぼってこられずにいるのかしら～～～」

「もう秋も過ぎて、冬が来るといふ時期なのに～」

三島さんは濡れた体や衣服をふきながら、そんな事を言っていた。

そんな、ふと、思いついた事を、お互いに話しながら、時に、ふいっと、いなくなる三島さんの不思議な姿や行動を見ていて、高津さんは、純輔に、何気なくつぶやくように・・・

「ここは気兼ねと時間は必要ないところなんだ！」

「自分が過ごしやすいようにしていれば！」

「何かが分かって来て、気分が良くなる場所だろう！」

確かに、そうだと、純輔も少しずつ感じてはいたが！

二日ほど、何もせずに、寝て起きて、話をして、森を少し歩き、河を眺めて、ゆったりとした時間が過ぎて行ったけれど、純輔には心からこの自然とゆったりとした世界には浸りきれずにいた！

どうしてもふとした瞬間に「カコ」を想い、恋しさと不安な気持ちになって来る事を抑えられなかった。

三島さんが、突然、声をかけて来た！

「どうやら、やっと今頃に、サーモンが上がって来たから！」

「釣りをしてみてもは、いかがかしら？」そう言って進めてくれた。

以前から、純輔も、サーモン釣りをしてみたいと思っていた事で、さっそく実行する事になって・・・

九月の終りになる今頃になって、ほんの数匹、サーモンが河を遡上している姿を確かに観られた。

生まれ故郷を目指し、勢い良く、力づよく、ただ、いつもの年よりも、かなりおそい遡上だった。

サーモンの姿も、小さくて、数が少ないと、ボートを操る、若いひげ面の青年「ジョージ」君は、得意げに、ボートを右へ左へと、巧みにあやつり、フィッシングポイント

へ案内してくれた。

どのくらい、河をさかのぼったのだろうか、河幅は海のように広くなったり、又、大きなボートでは通り抜けられないほどの狭い場所を次々と走って行く・・・

気持ちの良い、川風を受けて、時には、波しぶきをかぶる事もあり、突然驚かせては、ジョージは、にやりと薄笑いして、でも、その表情が少しも嫌味には感じないおおらかさがある青年だ！

まだ、ハタチ前の三島さんの息子で、アラスカ大学の学生だった。

だが、誰も、三島さんの本当の子供か、養子なのか、分からないが、そんなことは誰も気にしてはいない、ここでは小さな事だ！

恋しくて <永遠> 下巻

<http://p.booklog.jp/book/33950>

著者：みしまゆみこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hsa33712/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33950>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33950>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.